近世大和における地蔵信仰

――奈良町「地蔵盆」の周辺――

村上紀夫*

要旨

地蔵盆とは、辻々に祀られている「お地蔵さま」と呼ばれる石仏などをまつる行事で、京都府・奈良県・滋賀県などで行われている。地蔵盆の歴史的研究も次第になされるようになってきているが、奈良県の地蔵盆についての研究はそれほど多くない。奈良県内で行われている地蔵盆の特徴として、奈良町など奈良市内では多く七月に実施されている点（他地域では多く八月）が挙げられる。この点に関わっては、先行研究で近世段階で六月（他地域では旧暦七月）に「地蔵会」が実施されていたことが指摘されていた。

しかし、近世の史料を精査すると地蔵会を六月に行うところと七月に行うところがあった。これは、毎月の地蔵菩薩の縁日である二四日に中世の興福寺などで月次勤行として地蔵講が行われていたことと関わると思われる。中世権門における地蔵信仰のたかまりと連動し、地蔵信仰が民間に広まり、近世に町の行事として定着したのではないだろうか。

【キーワード】地蔵盆、地蔵信仰、奈良町、『大乗院寺社雑事記』

はじめに

地蔵盆とは、辻々の祠に祀られている「お地蔵さま」と呼ばれる石仏などをまつる行事で、京都を中心として奈良県・滋賀県・福井県・大阪府・兵庫県などで行われている。地蔵菩薩が子どもを守るとされていることもあり、地蔵盆ではしばしばお参りに来た子どもに「お菓子」などが配られている。

地蔵盆については、民俗学などによる現状の調査や社会学からの地域コミュニティとの関わりについての研究などの蓄積はあったが、歴史的な研究は多くはなかった。民俗学の林英一が滋賀県を中心としたフィールドワークと文献調査をもとにした『地蔵盆』がひとつの到達点であったが、マチで行われていた地蔵会の伝播への関心から主として滋賀県など都市部よりも周辺部を中心とした研究であった。[1]

また、清水邦彦は近世初頭には京都で行われなくなっていた京

平成29年9月13日受理　*文学部史学科　准教授

都の周縁部にある六ヶ所の地蔵尊をめぐる六地蔵参りが一七世紀半ばに再開されるなか、六地蔵参りを模倣して各町で地蔵盆が行われるようになっていったとされていた。[2]

こうした先行研究をふまえ、筆者は京都の洛中を中心に文献史料に基づいて、一七世紀初頭に子どもたちによって石仏を「地蔵」と呼んで祭祀する現象が流行し、近世京都の都市共同体の形成にともない、町によって共同体の「祖先」を祭祀する行事として実施されるようになったと指摘した。[3]

このように民俗学的研究に加えて、文献史料に基づいた「地蔵盆」の歴史的研究も次第に進められてきているのだが、奈良県内の事例については、自治体史の民俗編などでの事例報告はあるが、地蔵盆の歴史そのものを対象とした研究は多くない。京都とともに中世以前から都市的な発展をしていたことはいうまでもなく、また共同体の形成が進んでいたことも周知の通りである。[4] とすれば、奈良のとりわけ奈良町[5]と呼ばれているような地域における「地蔵盆」について明らかにすることは、「地蔵盆」を理解するうえで重要になってくるであろう。

奈良県を中心に地蔵盆の歴史について論じた奥野義雄は、当初は地蔵盆が中世に寺院で行われていた彼岸会と関わっていたと示唆していた。[6] しかし、のちには念仏講との関わりを重視するようになっているなど、通説たりうる見解はいまだ出されていないと言わざるをえないのが現状である。[7] 奥野は中世の地蔵講が祭礼化して近世に地蔵祭となり、近代に地蔵盆と変化していくという見通しを示している。[8] しかしながら、ここでも念仏講と地蔵盆がいつから関わりを持つようになったか、そして中世の地蔵講が祭礼化する要件はなにかについては未解明なままで残されており、依然として仮説の域を出ているわけではない。[9] 赤田光男は、『大乗院寺社雑事記』や『多聞院日記』といった中世奈良の記録に知足院などの地蔵堂で七月二四日に地蔵尊を祀る行事が行われていたとし、「地蔵盆」の語は見えないが、中世においても盆月の七月二四日に「地蔵盆の存在を示唆」すると述べている。[10] ただし、ここでは寺院で地蔵尊の供養が行われていることについて述べているが、「地蔵盆」とされている行事の内容については言及されているわけではない。

また、清水邦彦は二〇一〇～一二年に奈良町で行われている地蔵盆の調査を行い、子どもが数珠繰りなどをする町と大人中心の行事が行われている町があることを指摘する。そして、京都で行われていた地蔵祭が奈良に伝播して定着するなかで、京都と同じように子どもが数珠繰りなどをする町と、少子化などによって大人中心となっている町に二分化していったという見通しを示す。もっとも、大人中心の行事が行われている町で、かつて子どもが参加していたかどうかなどについては確認されておらず、子ども中心から大人中心に移行したのか、あるいは最初から地域の事情で二分化していったかについては慎重に結論を留保していた。[11]

ところで、現在の奈良町では、八月の盆行事実施に先立つ七月の二三、二四日に「地蔵盆」が行われているところが多い。奥野義雄によ

れば、七月二三、四日に地蔵盆が行われているのは奈良盆地、「奈良市内に多く見られる」という。[12]

一方、奈良市外の県内各地では八月に実施されているところが多いようだ。[13]京都・滋賀・大阪で現在も盛んな「地蔵盆」も、盂蘭盆会の後、すなわち八月の地蔵尊の縁日である二四日に行われていた。近年は実施しやすいように前後の土日に行われることも多くなっているが、七月ではなく八月の盂蘭盆会以降の週末が一般的である。

なぜ、奈良の市内では八月ではなく七月に「地蔵盆」が実施されているのであろうか。近世に七月に行われていた行事が近代以降の新暦導入後も七月に実施されたということも考えられるが、どうやらそうではないらしい。この点については、既に清水邦彦が注目しており、近世の『南都年中行事』に旧暦の六月二四日に奈良では広く地蔵祭祀が行われていたことから、「奈良の地蔵盆が他地域より一ヶ月早いのは、旧暦からの引き続きと云える」と指摘している。[14]これは非常に重要な指摘であるが、なぜ奈良では盂蘭盆会の後の七月二四日ではなく六月だったのだろうか。この点については清水も「旧暦に於いて、地蔵盆が六月に行われた理由は今のところ、不明である」とし、明確な答を示していない。[15]

しかしながら、これまでの研究で京都では五山の送り火によって、祖先が帰っているなかで行われる「地蔵盆」の祭祀対象は、祖先なのか、それとも地蔵菩薩なのか、盂蘭盆会とのかかわりはどうかという点についても議論があるところである。そうしたなか、奈良で旧暦七月の盂蘭盆会のはるか前に「地蔵盆」が実施されていることは、「地蔵盆」という行事を理解する上でも大きな問題となりうるであろう。少なくとも奈良においては、盂蘭盆会と地蔵盆を関わらせて論じることの是非は問われることになってこよう。[16]

そこで、本稿では奈良盆地で主に実施されている七月の地蔵盆（前近代は六月の「地蔵会」）について、史料に基づいて検討し、その起源について考えてみたい。

一　地蔵盆・地蔵会式・地蔵講

現在の奈良県内で行われている地蔵盆について、奥野義雄の調査では子どもが関与している地域が少なくないことやジュズクリ（百万遍念仏数珠繰り）が関わっていることが指摘されている。もっとも、清水によれば、先にみたように近年の奈良市内では、子どもではなく大人中心に行事が行われている町も少なくないようである。[17]

筆者が二〇一七年に見学

奈良町の地蔵盆（2017 年撮影）

した範囲でも、朝のうちに僧による読経が行われ、あとは大人が町内の各家から届く供物の応対をしながら、飾り付けられた地蔵のホコラの前に集まっているようなところも多かった。数珠繰りが行われているところもあったが、なかには場所がとれないなどの理由で数珠繰りが実施できず、地蔵堂に数珠をかけているところもあった。ここ数十年でも地蔵盆の姿は変化してきているようである。

そこで、地蔵盆の歴史を振り返るには古文書や古記録に拠ることになる。奥野が記しているように、現在の奈良市内では七月に地蔵盆が行われているところが多いようだが、これは近世にまで遡るのだろうか。

既に触れたように、清水邦彦は『南都年中行事』により、奈良では「諸寺地蔵尊」の法会が六月に実施されていたとしている。[18] 確かに元文五年（一七四〇）に村井古道が書いた『南都年中行事』[19]には、六月に多数の地蔵の法会に関する記事が掲載されているのだが、実は完本ではなく、七月の行事について記した部分を欠いているのである。[20] そこで、同じ著者によって享保二〇年（一七三五）に書かれた奈良町の地誌『奈良坊目拙解』[21]を繙くと、奈良町や寺院に祀られている多数の地蔵尊が掲載されているのを見ることができる。法要の日について記されているものは多くはないが、木辻町にある辻堂の本尊である石仏の木辻地蔵は「毎七月廿四日祭之」と七月に祭祀が行われていたことが見えていた。

また、『南都年中行事』でも、蓮乗院地蔵堂と興福寺内福恩院地蔵堂では、六月二四日と七月一五日に開帳していることが見えているし、東大寺内の真言院地蔵菩薩は六月二四日、七月一五日、二四日に開龕しているという。つまり、現在の奈良市内でも七月と八月に地蔵盆が行われているように、近世には地蔵会を六月に行うところと七月に行うところがあったことになる。

ここで、特に注意したいのは六月と七月の両方で開扉が行われていた東大寺真言院の存在である。僅か数例だけなのだが、特定の月ではなく、複数の月の地蔵尊の縁日に行われる地蔵尊を祀る法要があったことは重要である。というのは、地蔵信仰の研究者であった真鍋廣済が、毎月地蔵の縁日二四日に行われた地蔵講のうち、「その内、盂蘭盆月に行われたものを特に地蔵盆と称したものと考えられ」ると指摘しているのである。[22] 地蔵講とは、真鍋に拠れば『今昔物語』にも見えている地蔵を共同祭祀する民間信仰であるという。実際には、「地蔵盆」という名称自体が近世後期から近代まで現れておらず、近世期には「地蔵会」「地蔵祭」が一般的なので、毎月実施される地蔵講のうち盂蘭盆会月だけが「地蔵盆」と呼ばれるようになったと単純にはいえない。

とはいえ、地蔵講は奥野義雄が祭礼化した地蔵盆・地蔵祭のルーツとして想定していた行事である。地蔵講から「地蔵盆」に直結するわけではないにしても、地蔵盆の近世的行事であり、毎月地蔵尊の縁日に行われていた「地蔵講」と奥野がそれが祭礼化したとしている「地蔵会」「地蔵祭」との関わりについては検討しておく必要があろう。

ここで、再び『南都年中行事』を確認したい。六月二四日に地蔵尊の祭祀が広く行われていたのは既に述べた通りだが、さらに詳しく見てみると①寺院や仏堂内の本尊など、②町の会所や地蔵堂などに祀られた町有の地蔵尊にわけられる。さらに記されていないが③現在の地蔵盆で祭祀対象とされている辻々の祠に安置された石仏もこの日に祀られていたであろう。

つまり、奈良において、六月の地蔵尊祭祀を理解するうえでは、辻の地蔵を祀る民俗行事である「地蔵会」だけではなく、これらの寺院内で執行される法要との関連も見ておかなければならないだろう。

二　中世の地蔵講

奥野義雄・赤田光男は、地蔵盆の歴史的な背景を論ずるにあたり、中世興福寺の大乗院尋尊による『大乗院寺社雑事記』や『経覚私要鈔』から、「地蔵講」「地蔵法楽」といった記述を検出し、「地蔵法楽」が七月二四日だけでなく、一〇月二四日にも行われ、地蔵呪の勤行も七月、八月、九月に実施されていることをつきとめ、これらが七月や八月に限られた行事ではないと指摘している[23]。この指摘は全く正しく、『大乗院寺社雑事記』には毎月二四日、月次勤行として地蔵法楽・地蔵講などが行われている[24]。そして、尋尊は地蔵法楽について、「為後生引道[導]極楽往生也[25]」と記しており、極楽往生を願って行っていたことが知られる。

このほか、地蔵法楽などを勤めたあと、しばしば知足院・十輪院・福智院といった地蔵信仰で知られた寺院へも参詣しているのである。

尋尊は、文明四年（一四七二）九月二四日、自らの日記に「地蔵霊験之所々者、春日西屋地蔵立像、勝願院地蔵、知足院地蔵、福智院地蔵」と奈良の霊験で知られた地蔵を書き留め、これらの寺院に尋尊もまたしばしば足を運んでいる。例えば、永正二年（一五〇五）正月の地蔵縁日には、地蔵法楽・地蔵講の記事とともに「所々地蔵行也[26]」とあり、年頭にはあちこちに祀られた地蔵菩薩をめぐって祈願をしていたようである。

彼の地蔵信仰は、門跡としてのものではなく、個人的な信仰によるものであったようだ。それが明確になるのは尋尊晩年の明応七年（一四九八）のことである。

一福智院地蔵ニ参詣、立願子細在之、必々可成就事也[27]

なみなみならぬ思いをもって、福智院地蔵に参詣していることがうかがわれよう。尋尊について総括的に論じた鈴木良一は、尋尊の地蔵信仰が庶民信仰とさほど隔たるものではないとしている[28]。

確かに、この時期には地蔵信仰で広く知られた福智院の地蔵堂再建が進められ、奈良町などで大規模な勧進も実施されている。文明一一年（一四七九）八月七日には、尋尊が福智院に参詣するにあたって次のように記している。

一福智院地蔵堂ニ参詣了、近日奈良中者共当堂ニ参詣、事外事也、色々理[利]生共在之之由聞之、不思儀事也、此地蔵之腹内ニ大明神御

作之地蔵奉納之云々、惣而天竺・唐土・我朝三国ニ地蔵之験記相尋之、記之内之随一ニ当堂ハ入了、西南院之六巻絵是明鏡也、奈良中地蔵菩薩雖多之、験記ニ奉伽ハ当本尊也、可信仰々々々[29]

「三国」に「随一」とその霊験が知られ、奈良中に地蔵は多いが、この福智院の地蔵を信仰すべしと述べられている。「奈良中者共」が福智院の地蔵菩薩に競って参詣するような地蔵信仰の高まりがあったことがうかがえる。

さらにここで注意を喚起しておきたいのが、春日社と地蔵菩薩との関係である。この記事にも「大明神」、すなわち春日明神が自らつくった地蔵を福智院地蔵の「腹中」に納めているとされる。なぜ、春日明神が唐突に出てくるのだろうか。

これは、春日社「三御殿」の本地仏が、「地蔵菩薩」とされていたからであろう[30]。春日社と地蔵菩薩の関係は、広く知られていたようで延徳三年（一四九一）の書写になる『地蔵菩薩霊験絵詞』にも「地蔵霊験所」として各地の地蔵菩薩を祀る寺社が列記されているなかにおいて、「大和」の筆頭に「春日大明神」が挙げられている[31]。つまり、奈良において、地蔵菩薩は春日社と一体の存在として信仰されていたということができる。

こうした地蔵信仰が、五摂家の一つである一条家出身で特に春日明神を信仰する理由がある尋尊だけのものでなかったことは、先の文明一一年（一四七九）の記事からもうかがえるだろう。実際、地蔵信仰が庶民にまで広まっていったのもこの時期であったという。赤田光男は奈良県内にある紀年銘のある地蔵石仏などを精査し、鎌倉時代から徐々に浸透していくが、室町時代中期後半、すなわち尋尊が生きていた時代に一気に広まり、戦国時代に流行を見せたことを指摘している[32]。こうした地蔵菩薩の石仏が大量につくられたことは、とりもなおさず近世以降の地蔵会で祭祀対象とされることの多い、地蔵菩薩の石仏が供給されていくということにほかならない。

中世の奈良において、興福寺と春日社の影響力が極めて大きかったことはいうまでもなく、春日社と一体とされた地蔵菩薩は特に信仰を集めていくようになったであろう。そうしたなかにあって、身分の上下を問わず地蔵信仰が浸透していく。

さらに、一五世紀の半ばに福智院のような霊験あらたかな地蔵菩薩を本尊とする寺院が伽藍復興のために勧進をはじめる。福智院では地蔵堂修理が文明一〇年（一四七八）に始まった。

一福智院地蔵堂修理自今日始之、地蔵六万躰摺之、十方勧進也、聖六人善久方ニ仰付之了（下略）

とあり、善久をリーダとする六人の勧進聖が「地蔵」の御影札を六万躰用意して十方に配って資金を調達している[33]。この過程では勧進聖が「堂の縁起・御利益を半ば勝手に創作し」ており、「この御利益の流布によって人々はこぞって堂に参詣し」ていた[34]。こうした勧進活動のなかで進められた地蔵菩薩の霊験譚の唱導は、ひとり福智院地蔵堂の信仰拡大にとどまらず、地蔵信仰の普及にもひと役買ったことであろう。

そして、まさにこの時期、奈良において、近世の奈良町につながるような町共同体が形成されはじめていく。藤澤典彦は念仏講碑や墓標が戦国期末から急増することに着目し、この時期に都市的な自治組織が形成されていくと見ている[35]。そして、現在も町で「地蔵さん」として祀られている石仏の多くが一六世紀から一七世紀のものであり、寺檀制度以前の庶民層の葬送と死者供養にかかわって安置されたものではないかという指摘もある[36]。

一五世紀の奈良における興福寺や地蔵菩薩を本尊とする寺院周辺における地蔵信仰のたかまりや、興福寺で尋尊らが「極楽往生」を願って執行される地蔵講にやや遅れて、一六世紀の奈良町において地蔵信仰が急速に浸透している。この点に鑑みれば、興福寺などの寺院で地蔵菩薩の縁日である二四日に行われていた月次の法要が、中世末から近世にかけて形成されていく町共同体における死者供養にかかわって、地蔵祭祀が民間に広まっていき、近世に町の行事として定着したのが地蔵会であったのではないだろうか。

こうした中世権門寺院における地蔵講から民間への浸透過程を明確に証明する史料を挙げることは現状ではできないが、ここで気にかかるのが近世に町で行われていた行事の呼称である。時代は大きく下がるが、東向北町の「万大帳」の次の記事をご覧頂きたい。

六月廿三日（文久四年）

一地蔵会式ニ付、町内地蔵尊江御信心御方々ゟ寄進ニ而、上りもの

左ニ

一石花生　　壱本　施主当町田中久

但し高サ三尺、廻り弐尺斗、形丸ニ而上蓮華ニ而下丸なり

年号月日形入有之候

（下略）[37]

東向北町でも六月二三日に町の地蔵尊を中心に行事が行われていたようで、地蔵会に先だって町内から花生けなどが寄進されている。この町では、嘉永七年＝安政元年（一八五四）に起こった安政地震で会所が大破しており、文久四年（一八六四）になって修復が進められている。恐らく、地蔵尊関係の施設も地震で破損しており、地蔵会にあわせて修復が行われたのであろう。

ここで注意しておきたいのは「地蔵会式」という表現である。会式とは、「法会」のことであるが、京都などでは管見の限り地蔵会・地蔵祭という表現はあっても「会式」という言い方はしていない。では、東向北町だけの事例かというとそうでもなく、例えば東吉野町では、宝暦二年（一七五二）の「木津村地蔵会式由緒書」（傍点村上）が残っている[38]。また、奥野義雄によれば、奈良市丹生町で行われているものは地蔵盆ではなく「地蔵会式（いせき）」と称しているという[39]。

いずれも奈良市内の事例ではないが、奈良では広く地蔵を地域で祀る行為を仏教的な法会に準じて「会式」と呼ばれていた可能性も捨てきれない。

こうした「会式」という表現からも、地域社会で民俗行事として実施されている地蔵盆は、奈良においてはかつて寺院で行われていた法

要である地蔵講（地蔵会式）が民間に定着し、年中行事化していったと考えておきたい。

おわりに

ここまで、奈良町の「地蔵盆」について史料から検討を加えてきた。ここでは、①近世奈良の寺院では、先行研究で指摘されていたように六月に地蔵菩薩を祀る法要が行われていた。②一方で、六月、七月と複数回にわたって地蔵菩薩を祀る寺院も存在していた。③こうした地蔵菩薩の縁日に地蔵菩薩を寺院内で祭祀するのは月次で実施されていた地蔵講と関わるのではないか。④中世後期には寺院内外で身分の上下を問わず地蔵信仰が高まり、拡大していった結果、⑤中世に寺院内で実施されていた月次の行事である地蔵講が民間に定着し、近世における町の年中行事となったのが地蔵会ではないか――といったことを指摘した。

当初の目論見に対して、実際に明らかにできたことは少なく、今後の課題とせざるを得ない。多くは史料的な裏付けを欠き見通しを示したにすぎない。とりわけ、奈良町の「地蔵会」がなぜ、六月に収斂していったかという最大の問題については、明らかにすることができなかった。とはいえ、近世初頭に町で始まったと思われる京都の地蔵会とは、その性格を異にしている可能性が浮かび上がった。六月という「盂蘭盆会」と全く関わりのない月に実施されている点からも京都との違いは明確であり[40]、恐らくは奈良固有の春日社や興福寺といった権門寺社や福智院などの地蔵菩薩を本尊とする寺院法会[41]の存在が大きな影響を与えているのだろう。現在、地蔵盆が七月に実施されている（旧暦なら六月）地域の多くが奈良盆地に多いという事実も興福寺などとの関係を示唆している[42]のではないだろうか。

大森町では、そこで行われている地蔵盆とそこで祀られる石仏（地蔵）の起源について、このような伝承を聞くことができた。

鎌倉時代ごろに大きな洪水があって、興福寺の方からお地蔵さんがたくさん流れてきた。この辺は興福寺よりも下流にあたり、以前は池があったので、このあたりにお地蔵さんが流れ着いた。このあたりにあるお地蔵さんは、みんなその時に流れてきたものだと言われている。

勿論、史料的に裏付けがとれるわけではないが、町の地蔵盆・地蔵尊のルーツとして、興福寺との関係が強調されていることには注意したい。少なくとも、地域社会において、町で祀っている石仏を興福寺から来たものだと理解していることは、興福寺の影響を考えるうえでも興味深い。

注

（1） 林英一『地蔵盆―受容と展開の様式』（初芝文庫、一九九七年）

（2） 清水邦彦「路傍の地蔵像の歴史的考察」（『宗教研究』八四巻四輯、二〇一一年）、清水邦彦「京都の地蔵盆の宗教史的研究」（『比較民俗研究』

二五号、二〇一一年）

（3）拙著『京都地蔵盆の歴史』（法藏館、二〇一七年）

（4）永島福太郎『奈良』（吉川弘文館、一九六三年）、安田次郎『中世の奈良』（吉川弘文館、一九九八年）など。

（5）「奈良町」という呼称自体は戦後になってからのものだが、本稿では東大寺・興福寺門前、元興寺旧境内地域など、近世の奈良町奉行所成立によって町切が行われて成立した「町」一帯をさしあたり対象として「奈良町」と呼ぶ。

（6）奥野義雄「地蔵盆」（『奈良県立民俗博物館だより』Vol.IX, No.2、通巻三二号、一九八二年二月）。奥野は八月二四日に行われる奈良盆地周辺と山間部の地蔵盆について、『多聞院日記』などに見える八月二四日に地蔵講が行われているとともに秋彼岸の法要が行われていることから祖先供養と地蔵信仰が結びついて八月の地蔵盆になっていったのではないかと示唆している。この議論がなり立つには、新暦施行以前から八月に地蔵盆（地蔵会）が実施されていないといけないが、実際には七月に実施されていたものが新暦施行に伴い一月遅れの八月の行事となっており、中世寺院の彼岸会を結び付けるのは無理があろう。奥野自身も後述する一九八六年の論文「地蔵盆と念仏講」では、彼岸会については触れていない。

（7）奥野義雄「地蔵盆と念仏講」（『仏教民俗学大系』第六巻「仏教年中行事」、名著出版、一九八六年、のち同『祈願・祭祀習俗の文化史』岩田書院、二〇〇〇年所収）

（8）前掲、奥野義雄「地蔵盆と念仏講」

（9）前掲、奥野義雄「地蔵盆と念仏講」

（10）赤田光男「南都の盆と地蔵盆の行事」（『日本文化史研究』第四八号、二〇一七年三月）

（11）清水邦彦「奈良県奈良市中心市街地の地蔵盆」（『西郊民俗』第二二四号、二〇一三年）

（12）前掲奥野義雄「地蔵盆」

（13）前掲奥野義雄「地蔵盆」、同「地蔵盆と念仏講」

（14）清水邦彦「奈良県奈良市中心市街地の地蔵盆」（『西郊民俗』第二二四号、二〇一三年）

（15）前掲清水論文

（16）前掲赤田光男「南都の盆と地蔵盆の行事」など

（17）前掲清水論文

（18）前掲清水邦彦「奈良県奈良市中心市街地の地蔵盆」

（19）喜多野徳俊訳注『南都年中行事』（綜芸舎、一九七九年）。

（20）一ヶ月間の行事を一冊にしたもので完本であれば一二冊からなるはずだが、四・五・七・八・一〇月の五ヶ月分を欠く。なお、喜多野徳俊訳注『南都年中行事』「まえがき」によれば、本書は水木家にある村井古道自筆本によったとある。「水木家」とは奈良女子高等師範学校で教鞭を執っていた水木要太郎であろうが、国立歴史民俗博物館の『水木家資料目録』（国立歴史民俗博物館、二〇〇三年）には見えていない。現時点では原本の所在が確認できていないので、喜多野徳俊による前掲書によった。

（21）『奈良市史編集審議会会報一』（奈良市史編集審議会編集・発行、一九六三年）

（22）真鍋廣済『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店、一九六〇年）

（23）前掲奥野義雄「地蔵盆」、前掲赤田光男「南都の盆と地蔵盆の行事」

（24）鈴木良一『大乗院寺社雑事記』（そしえて、一九八三年）

（25）『大乗院寺社雑事記』文明九年四月二四日条

（26）『大乗院寺社雑事記』永正二年正月二四日条

（27）『大乗院寺社雑事記』明応七年三月一六日条

（28）鈴木良一『大乗院寺社雑事記―ある門閥僧侶の没落の記録』（そしえて、一九八三年）

（29）『大乗院寺社雑事記』文明一一年八月七日条

（30）『大乗院寺社雑事記』文明一九年六月晦日条

（31）真鍋廣済・梅津次郎共編『地蔵霊験絵詞集』（古典文庫、一九五七年）。なお、「春日大明神」の他には、南円堂、橘寺、法隆寺、矢田寺、奈良福

智院、川上目蔵君別所が挙げられる。

(32) 赤田光男『中世大和の仏教民俗信仰』(帝塚山大学出版会、二〇一四年)

(33) 『大乗院寺社雑事記』文明一〇年七月六日条

(34) 阿諏訪青美「奈良福智院地蔵堂の再興と『勧進憑支』」(阿諏訪青美『中世庶民信仰経済の研究』校倉書房、二〇〇四年)

(35) 藤澤典彦「近世奈良町成立の画期」(小野正俊・萩原三雄編『戦国時代の考古学』高志書院、二〇〇三年)

(36) 狭川真一「中世都市奈良の宗教環境」(中世都市研究会編『「宗教都市」奈良を考える』山川出版社、二〇一七年)

(37) 奈良市東向北町町有文書『万大帳』九番(『日本都市生活史料集成 九門前町篇』学習研究社、一九七七年、ただし奈良県立図書情報館架蔵写真帳により訂正)

(38) 『東吉野村史 史料編上巻』(東吉野村教育委員会編集・発行、一九九〇年、三九〇頁)

(39) 前掲奥野義雄「地蔵盆と念仏講」

(40) 京都では都市域に設けられた中世墓地が近世の寺町と境内墓地の形成によって忘却されていくのに対し、奈良では戦国期においても「信仰が止まっているのではなく、違う形の信仰に変化したけれども、町家それぞれの感じは細々と続いていて、石造物に対する信仰はあったのではないか」という見解(中世都市研究会編『「宗教都市」奈良を考える』所載「全体討論」における狭川真一発言)が出されている。石造物を取りまく環境も京都と奈良では異なっている可能性がある。

(41) 二〇一七年の調査においても、七月二三、四日に「地蔵盆」を実施している町が多かった。京都・大阪・滋賀などでは、子どもの参加しやすさや、サラリーマンの家庭が増えて実施する大人が平日には集まりにくいことから八月二四日前後の週末に実施しているところが多い。こうしたなかで、奈良町で七月二三、四日を守っているのは、近隣にある福智院や十輪院といった地蔵菩薩を祀る寺院の法要とあわせようという意志が働いているのではないだろうか。

(42) 京都周辺から近世になって旧暦七月に実施される地蔵会が伝播したが、その時点で既に六月に権門寺院の影響で地蔵尊を祀る行事が行われていた奈良町周辺では、七月の地蔵会が受容されなかったのではないだろうか。現在の「地蔵盆」という呼称は、近世のものではなく、恐らくは近代以降のものであろう。「地蔵盆」呼称の定着については未考だが、京都などの事例をふまえれば、近代初頭に路傍の石仏撤去が新政府によって命じられ、民俗行事が中断した後、復活していくなかで近隣で使われる「地蔵盆」の称が受容されたのではないだろうか。

【付記】本稿は、二〇一六年度、奈良大学研究助成「大和国東山内の歴史的環境に関する研究」の成果の一部である。二〇一七年七月二三日に実施した奈良町の地蔵盆調査にあたっては、本学史学科の隅田瞳氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

Summary

Jizo belief in Nara in the early modern period

Norio MURAKAMI

【**Key words**】Jizo-bon, Jizo belief, Naramachi, “Daijoinjishazoujiki”